
南海の使者

砂漠の蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南海の使者

【Nコード】

N1863K

【作者名】

砂漠の蜻蛉

【あらすじ】

南海の国、ナーリア王国。そこでは、新王子就任の宴が開かれていたが……。

ガレン王国の王子ランクの物語。

登場人物

登場人物

ランク

リオル ガレン王国王子。不思議な体験から、ディアルガとパルキアに通じる事が出来る。

ハラン

ヨルノズク ランクの世話係。

カイナル

アリゲイツ ナーリア王国の王子の弟。

シュラー

デンリユウ 船乗り。ナーリアの海の事は詳しい。

タンナル

オーダイル ナーリア王国国王。

ラーク

フライゴン カトラル王国国王。

ケルト

アブソル カトラル七氏族の一人。

ハミネ・ハイラルソール

エネコロロ 二人いるサス貴国を納める一人。他人をからかうのが好き。

ナナ・タイカーナン

トゲチツス 二人いるサス貴国を納める一人。病弱。

カミア

シャワーズ シュラーの友人。船に弱い。

序章

ここはナーリア王国の最南端、バイル島。ナーリア王国は本土と、たくさんの諸島群を領地として、南の大陸のある大国、ホーエーム皇国の対する南の防衛線の役割を担っている。

バイル島は、この辺りの島の中で最も大きく、またそこから南に四十哩ほど先は魚が多く取れる漁場だった。

「シユラー。こっちはまずいだろ。流れが速くて危ない。」

「大丈夫だよ。俺の腕を信じろ。」

シユラーが舵を操ると、船は滑るように動き出した。船体の割に帆が小さいのは小回りが利く漁船だ。

「ほら、何んともないだろ。」

船は、縦にゆっくりと揺れ横揺れが無く居心地が良い。

「ホントだ、すげーなお前。」

「そうだろ。じゃあ今度はあの岩の裏側へ。」

意気揚々と船を操りあつという間に目指していた岩場に着いた。岩に船体をぶつけない様に回っていく。

「わっ！」

「何だ？」

船首の左、三哩ほどに突然、大きな船体が姿を現した。一見ホーエイムの貨物船の様だがこんな所に居るのはおかしい。

「あれはもしかして……。！掴まれっ。」

「何だいきなり。」

叫ぶなり、シュラーは船を後退させ、船群に走らせた。

「何なんだよ。」

「あれは、貨物船に見せかけたホーエイムの軍船だ。」

「そんな訳無いだろ。」

「いや少しだけ火薬の臭いがした。たぶんそうだ。」

もと来た海を、今出せる最大のスピードで戻っていく。

「嘘だろ……。」

そこにはさっきまで居た仲間の船が無く、無残にも壊された船の残骸が浮かんでいた。

1話 ナーリアへ（前書き）

やっと一話目ができた。

ランク「良くやった。このまま二話目も頼むぞ。」

1話 ナーリアへ

国境の丘を越えて三日。ようやく、潮の匂いが感じられるようになった。

目の前にある小高い丘を登ると、強い日差しと共に波打つ海が見えた。

「やっと着いたか・・・。」

「はい窮屈な思いをさせてしまい、申し訳ありません。」

「そんな事は良い。」

そう言つて、ガレン王国王子ランクが飛び降りる。長い間座ったままだったので、よろけそうになったが何とか踏み止まる。皆、過保護なので何かあると色々と面倒くさい。

そのせいで、眼下に広がっている景色をみすみす邪魔されたくは無。

海の無い国で育ったランクはこれが初めて見る海だった。

海は、どんな湖よりも青く澄んで砂浜は真っ白、そこから沖を見ると沢山の大型帆船が浮いている。港には砂浜と同じ白い石を積んで作った、四角い家が建ち並んでいる。その中で最も目に着くのは光の加減で薄い黄色の様な色に見える大きな建造物、ナーリア城だ。

ランクは、そこで行われる新王子就任の祝いの宴に招待されている。一（ランク個人ではなく国としてだが。）他にも、カトラルやサス、シュロ等の国も呼ばれているはずだ。

本来は国王が行くはずなのだが、重要な要件がる為ランクが代わりということである。

「綺麗だな。そう言えばハランはナーリアの出だったな。」

ランクは後ろの地面に止まっているハランに向いた。彼女はランクの世話係兼、教育係だ。

「ええ、ですがわたしはもっと内陸の方の出なので海はあまり見た事ありません。」

「内陸は意外と、畑があつたんだな。ナーリアの海産物は知っているが、農作物は知らなかった。」

「ナーリアは『海上の真珠』と呼ばれていますからね。」

「海上の真珠……か。その通りの美しさだな。」

王都であるナーリアはまさにその言葉がピッタリと当てはまった。

「あと、もうひと頑張りだな。」

ランク達は、丘をゆっくりと下って行った。

ナーリア城は海沿いに建てられていた。門は長い間の潮風でボロボロになったのを何度も直した跡があり、これまでの歴史を物語っている。

「ようこそ、我が城へ。ガレン王国王子ランク様。」

「此方こそ、ご招待有難うございます。」

ナーリアの国王はオーダーだったので怖いイメージがあったが見かけで判断してはいけない。現にこの方は気さくで話しやすい。

「おい、お前も挨拶をしろ。」

タンナルが横に居るアリゲイツを無理やり引き出す。

「うつせーな！どうせおれは何でも無いんだから良いだろ。」

「失礼な事を言うな。」

タンナルがアリゲイツの頭を叩く。

「つてー。なにすんだよ！」

「さっさと挨拶をしろ。わざわざ来て頂いたんだ。」

「何だよ！すぐ隣のくせに一番遅くきやがって！もう二日前には始まってんだぞ！」

「それが客人に対する態度かッ。」

タンナルがもう一度頭を叩く。

「何すんだよ！」

「もう良い。さっさと向こうに行ってる。それと客人に迷惑をかけるな。」

アリゲイツはまだ何か言いたげだったが、突然走り去ってしまった。

「申し訳ございません。カイナルにはきつく言っておきますので。」

啞然としていたランクにタンナルが謝ってきた。確かに下手をしたら国際紛争になるくらいのおおごとになる。が、南の防衛線であるこの国と戦をするほどガレンには余裕が無い。勿論、したくも無い。

「お気にしないで下さい。」

ランクが丁重に答える。

「本当に申し訳ない。出来れば、ナーリアの景色や食べ物を楽しんでいって下さい。」

「ええ、そうさせて頂きます。」

門を開けて中に入る。

「早速、嫌われてしまったな。」

「王子は全然悪くは無いです。我々が準備に時間がかかってしまい……。」

「分かっている。父上が突然言ってきたのだ。慌てて当然だ。」

ハランの弱気な言葉を無理やり否定してこの国の一時を楽しむことにした。

2話 カトラル王（前書き）

はあゝ。ハプニングが無いと話がうまく書けないよ。

ランク「出来ればこのまま何事もなく終わってほしいんだけど……」。

「

2話 カトラル王

着いてから一日たった。初日は、疲れて殆ど何もしていない。各国のトップに会える絶好のチャンスなのに。

「どうかしたの？ 顔色が悪いよ。」

廊下を歩いていただけなのに突然声をかけられた。

「そうでしょうか？」

「フラフラしてるよ、君。寝不足じゃない。」

そう言えば、昨日ずっと座ってたせいで体中が痛くてなかなか寝られなかった。

「ああ、大丈夫です。」

「そう？ 今日早く寝た方がよいよ。無理は禁物だからね。」

声をかけてきたフライゴンは金色の布を靡かせて廊下の反対側に消えた。

「（誰だったんだろう？）」

考えながら部屋に戻ると、ハランが飛び出してきた。

「良かった。王子、タンナル様が城内を案内して下さるそうです。行きましょう。」

「えっでもまだ何も準備を……。」

「良いですから。カトラル王も一緒にですから急いでくださいッ」

ハランは茫然としているランクの腕を掴んで部屋から飛び出した。

中央の大広間には既に、タンナルともう一人カトラル王が来ていた。

「あれ、あの人、何所かで……。」

「おや、また会ったね。君はガレンの王子様だったのか。」

金色の布を首に巻いたそのフライゴンは、さっき廊下で会ったばかりだ。という事は、

「私は、カトラル王国のラークだ。宜しく、ガレンの王子様。君の話は弟から聞いたよ。良い王になりそうだって言っていた。」

やっぱり。カトラルの王は王に見えない。と聞いていたけれど本

当だった。

「（まさか、この人だったとは。ん、待てよ。確かルークは、この人の弟って言うていたような……。）」

「ルークと全然似てない。でしょ。」

ラークが笑って言った。

「顔にかいてあるよ。」

「えっ。」

あわてて顔を触った。

「やっぱりそう思ってたんだ。」

「否っそのー。」

とてつもない大失態だ。カトラルと関係が悪くなったら大変だ。小国ガレンと大国カトラルでは国力の差がありすぎる。

「失礼しました。ラーク様ッ」

これは本当に謝るしかない。しかし、ラークは意外にも笑って見せた。

「良いよ。よく言われていたし、自分でも似てないと思っている。それと『様』は無しで、堅苦しいのは嫌いで……。」

この言葉にホツとした。流石は話術の天才。フォローが上手い。

「タンナルさん。またせてしまい申し訳ない。」

「良いですよ。気になさらないで下さい。」

明らかに十ほどは年が離れているのに、さんで呼び合っている。これが初対面なのだからたった数日でここまで友好関係を築けるのは凄い。

「ガレンの王子様。大丈夫？ちゃんと寝た？」

考え事をする時の癖でつついっポーっとしてしまった。

「だ、大丈夫です。」

「そう。」

「では、行きましょうか。」

タンナルが先頭で三人は歩きだした。

3話 時計（前書き）

やっぱりハプニングがあると話が書きやすいな。

3話 時計

タンナルは二人を城のある一室に連れて行った。そこには、かなり昔に描かれたと思われる絵があった。

上の方にある波は、おそらく海面を指す。という事はこれは海の中の絵ということになる。だが、そこには海中にいる筈の無い物が描かれていた。

銀の翼を持った大きな鳥である。

「貴方方は、ホーエイムの神話をご存知ですよね。」
あなた

「ええ、まあ。」

確か、大地をグラードン。海をカイオーガ。天をレックウザ。というポケモンが支配しているらしい。それで毎日、三回それぞれに祈りを捧げるそうだ。分かりやすいので南の大陸だけでなく、このあたりにも広まっている。

「我々には、それとは別に海の神がいると信じています。その名は、ルギア。」

「るぎあ？」

不思議な響きが頭に残った。銀の羽をもつ海中の鳥。ランクの頭の中で見てみたいという思いと、怖いと思う気持ちが二つ存在した。見てみたいという気持ちは分かるが、怖いという気持ちは描かれた絵にあった。海面に描かれている小型船よりも少し小さいくらい
の大きさだ。

小型船はたぶん漁船だから、5メートルぐらいはあるのではない

か。

「あれ、でも海はカイオーガが居るんじゃない。」

「色々な国には、色々な話があるんだよ。ガレンの王子様。全て実在するかもしれないし、しないかもしれない。」

ラークが良く分からないことを言う。

「つまり、人それぞれってこと。」

納得、それならそうと初めから言ってくれば早いのに。これも話術なのだろうか。

「ラーク様とタンナル様はどの様なご関係なんですか？」

「君も、結構頑固だね。」

ラークが仕方ないとでも言うように顔を掻いた。

「彼とは、気が合うんだよ。ナーリアもカトラルも根は商人だからかな。」

「そうだったんですか。」

「ランク王子、驚くのはまだ早いですよ。これは時計になっているんです。」

「時計？これですか。」

「そう、一定の速さで落ちてくる重りで針を回す仕掛けだ。」

時計の一番簡単な作り方は、棒を立てて、それを中心に十二に区切れればいい。わざわざ、こんな物を作らなくてもいいような気がする。

『流れ続ける時を計る事は不可能だ。』

突然の声に周囲を見回す。が、誰もいない。

「（もしかして、ディアルガ？）」

『そうだが。』

「（何で出てくるの。）」

『何か問題でもあるのか。』

「（そうじゃないけど……。）」

ランクはこっそりとラークのほうを向いた。

「（あの人は絶対に気付くと思うから、あんまり出て来ないでよ。）

」

『注文が多い主あまじだな。』

「（悪かったね。）」

「ガレンノ王子様、如何したの？」

「何でもありません。」

『主。何か来る。』

言ってるそばから、今度はパルキアだ。

「だから何。」

「何が？」

「何かありましたか？」

ランクの言葉に、二人が同時に振り向く。

「あ、いや何でも無いです。」

「隙やり！引つ掻く！」

突然、物陰からカイナルが飛び出してきた。

「おっと。」

いつの間にかランクがカイナルを捕まえていた。

「えっ。」

カイナルも驚いていたが、やった本人はもっと驚いていた。爪が触れる直前に、腕を掴んでそのまま後ろに押し倒したのだ。ランクが前に保身の為に教えた技術だ。

息子の姿を目にしたタンナルの目が、困惑と怒りが入り混じったようになる。

「ゲツ親父。」

その言葉でタンナルの怒りを抑えていたものが吹き飛んだ様だ。軽々とカイナルの首筋を持ち上げて宙吊りにする。

「さつきから言っていただろ！客人に迷惑をかけるな！」

嵐のような声で、カイナルを怒鳴るつける。しかしカイナルも負けではない、宙吊りの状態からなんとか抜け出そうともがいている。

「何だよ！さつきから俺ばかりに怒って！ここは俺が管理してる所なんだから良いだろ！」

「タンナルさん。もう許してあげましょうよ。彼も気にしていないと言っているし。」

ラークがランクの方を向いて、同意するように求める。

「タンナル様、気にしていませんから。」

ランクが控えめに言う。正面から堂々といける自信が無いからだ。

「カイナル！お前、部屋に戻ってろ！式典中は一步も出さんからな！」

「ああ、こつちがそうさせて貰うよ！頑固親父！」

そう言い捨ててカイナルは外へ飛び出してしまった。
ランクがなす術も無くランクを見上げる。それに気付いたランク
もお手上げと両手をあげた。

カイナルは自室ではなく、そのすぐ下にある裏庭にいた。ぶつぶ
つ文句を言っているのは、勿論タンナルの事だ。

「何だよ。親父は兄貴と他の国の王にしか興味が無いのかよ。」

そう言って近くにあった小石を蹴り飛ばした。石は、壁に当たっ
て自分の足元に戻ってきた。

「俺だって、やる時はやるのに。」

「自由になりたいか。」

突然の声に顔を上げた。勿論誰もいない。

「誰だ！出て来い！」

「分かるぞ、お前、自分が認められなくて怒^{いか}ってるんだな。」

「！何で。」

「自由になれば、力こそ全て。掟に縛られず、生きていける。」

何かが頭の上に落ちてきた。貝の飾りがついた腕輪だ。

「それを付けその通りに行動すれば、お前は自由になれる。」

「本当か。」

「勿論。」

それを最後に言葉が聞こえなくなった。
目の前には、落ちてきた腕輪がある。

「……。」

カイナルはそれを無言で付けた。

4話 島からの脱出（前書き）

忘れられそうだったシュラー達の話です。

シュラー「忘れられたってどういう事だ！」

カミア「こっちが無いと話が続かないくせに！」

ああ、カミアは登場人物にすら入れて無かった。

カミア「ヒ、ヒドイ。」

4話 島からの脱出

シュラーは逃げていた。後ろから、ホーエイムの投石攻撃が迫っている。

「おっと。」

シュラーは舵を切って、それを避けると海流に船をのせてさらに加速した。

この辺りの海域でシュラーに追いつける船は無い逃げながらシュラーは昨日あった事を思い出していた。

先日、仲間の船の残骸を見つけたシュラーは、急いで港に戻った。バイル島はこの近くで唯一大きな港があるナーリア諸島南方の島だ。

南からの攻撃の防衛線でもあるこの島は常時、軍が駐在している。港に船を付け、路地を走る。

「何だ!？」

地響きと共に砂埃が舞う。

「シュラー。」

「カミア。何があったんだ?」

声の方へ振り向くと青い体に鰭をもつポケモン、シャワーズの力ミアが息を切らして走ってきた。

「大変だ。島がホーエイムに襲われた！ナーリアの軍はもう持たない。」

「何だって！先鋭隊を置いてたんじゃなかったのかよ！」

バイル島には、軍の先鋭部隊が置かれていて、簡単にはやられない様になっているはずだ。

「それが突然の攻撃だったらしくて、何もできないで壊滅状態になったらしい。」

「どうするんだよ。」

「とりあえずこっちへ。」

カミアは逃げ惑うポケモン達の間をすり抜けていく。シユラーもそれに続いた。

半刻ほどたった所でカミアが立ち止まった。

「ここは……。」

目の前には、何食わぬ顔で広がる海があり、岩場にはどこから持ってきたのか帆船が一艘ある。

「ここは島の裏側、ここからならホーエイムに気付かれずに本土へ行けるかもしれない。」

「まさか、俺に行けって事か。」

「だって、二人の中で船を操れるのは貴方だけでしょ。」

カミアがシュラーを見つめる。

「付いてくからさ。」

カミアが本当に笑っているのが、逆に怖かった。

船の上で、シュラーはカミアに尋ねた。

「何でこんな船持ってたんだ？」

「おえゝぎもぢわるい。はきぞう。」

見ると、カミアが船縁から半分乗り出している。

「こんな時に・・・。」

カミアは船に弱い。乗るとすぐに酔ってしまふ。シュラーもなるべく気を付けてはいたが、今の攻撃の揺れで酔ってしまったらしい。

「カミア。大丈夫か。」

「おええ。」

「駄目だこりゃ。」

肩をすくめて、後ろを見る。

「カミア、起きろ。」

「な、何!？」

カミアが飛び起きた瞬間、ギギツと言う音と共にシュラーの頭ほどもある石が飛んできた。

「カミア、加速!」

「リョーカイ。」

カミアが船尾に走り海面に『みずてつぽつ』を打ちこむ。その反動で船は格段に進むスピードが上がった。

「よしつ。」

シュラーは船の上にある小さい旗を見た。

「風向、南南西、風力3、視界良好。バイル海流まであと少しだ。」

舵を右舷にきり、大型船では通れない岩場を突き抜ける。

「行くぞ、カミア！」

「おう。」

風を味方につけた船は、ぐんぐんと、艦船を引き離していった。

5話 急襲

月が無い夜。海は黒々として、飲み込んだ物を全て自分の中に溜め込むようにうねっている。港では灯台に篝火^{かがりび}を炊き、海に出た船乗り達の道標となっている。

まるで、飲み込まれるな。お前たちの帰ってくる場所はここだ。と言っているようだ。

自分の寝具から、カイナルは飛び起きた。

「いまのは……。」

辺りを見回すが、勿論何も無いし誰も居ない。部屋から望める庭も、灯台の篝火でぼんやりと浮かび上がっているだけだ。

「嫌な夢を見た。」

「夢ではないわ。」

誰も居ないはずの部屋に突然声が響いた。

「！だ、誰だ！」

「誰ですって。もうお忘れ？寂しいわね。」

「その声。」

「思い出したみたいね。頑張っつてね。」

「おいっ。まてっ！」

呼び止めた筈の聲は開いた窓から入ってきた夜風と共に消えてしまった。

「うつつ。」

ランクは部屋の隅に立ちすくしていた。理由は話しに全くついていけないことだ。

各国の主達は、決して表を見せない。その様な話し方が苦手なランクは迂闊に変なことを言ってしまうていないか気が気でない。

「話についていけなくて蹲ってる?」

「ラーク様。」

「もしかして、誰が誰だか分からないとか?」

ふざけて言っているのか、本気で言っているのか。

「教えてあげるよ。まず目の前に居るのがカトラルのラーク・セレイン。で、あそこに居るアブソルが、七氏族のケルト・ユーナ。」

ラークが指差した方には部屋を見渡せる場所で、他人を拒絶するように待機しているアブソルが見える。あちらも気付いた様で目礼を返してきた。

「弟と同じで冷たそうだけど優しいと思う。」

「はあ。」

自分の国の領主なのに。

ランクの考えを感じ取ったのが、ラークが、冗談だよ。と付け加えた。

「で、あちらはこの国の王。タンナル。君も知ってるから説明は無しで良いね。で、あそこで話しているのがシュロ王と、サス貴国のハミネ・ハイルソール。」

見ると、エネコロロとユンゲラーが話をしている。シュロはあの戦いから肩身が狭くなってしまうている。彼はそのときの王の弟らしい。

「残念ながらシュロ王の事はよく知らないんだよね。でも、」

ラークが耳を貸すように仕草で示す。耳を近づけるとラークは小声で

「ハミネ殿には気をつけた方が良いよ。怒らせると怖いからね。」

と言った。

「何でしょうか？ラーク様？」

後ろからの声にラークが背筋をビシッと伸ばした。

「ハ、ハミネ殿。」

「ラーク様。お言葉が過ぎるのはどうかと思いますが？」

「アハハ。そ、そんな事言ってますよ。ね、ねえガレンの王子様。」

ラークが同意を求めてきたが、何と返せばいいのか分からずに黙り込んでしまった。

「ほらやっぱり。」

「……。あつ！ナナ殿は如何されたのですか。」

「なに話をそらそうとなさっているんですか。ナナは自室で休んでいます。分かりましたら、さっきほどのお言葉の事、詳しく、丁寧に、教えて頂きたいものですね。」

「うつつ。」

ラークがハミネに連れさらわれてしまって、今度こそ一人になってしまった。ハランは何処かへ行ってしまったし、だからと言って話せる事が無い。

上を見てみると、何処かで見た事があるような影が動いた気がした。

それはおもむろに銚を手にとると、先をランクに向け投げた。

「ケルト！」

どこから飛び出してきたラークとハミネがランクを突き飛ばす。
その間にケルトが飛び出し銛を弾くと影に向かってかまいたちを
打ち込んだ。

「ギャッ！」

と、悲鳴が聞こえ影が倒れた。

6話 ナーリアのまじない

倒れた影をケルトが抑え込む。

しかし、その必要はすぐ無くなったらしい。

糸が切れた人形のようにピクリとも動かなくなってしまったらしい。らしいというのは実際に見た訳ではなく後からラーク様に聞いた話だからだ。

「タンナル様。宜しいでしょうか？」

「……ああ。どうぞ。」

部屋に入ると寝具の上にカイナルが横たわっている。

ランクに向かって銚を投げて危うく大惨事になるところだった。事情を聴こうにも意識が無くてはどうする事も出来ない。

「ランク様。ご怪我はありませんか？」

「はい。おかげさまで。」

実際、突き飛ばされた時ぶつけた所が傷むが、これ以上小国同士でいざこざが起こるのはまずい。

「気分が悪いな。」

頭の中で声が響く。

「空間を汚されるのは気分が悪い。」

「えっ。」

『あやつに何か感じる。』

あやつと言うのは、カイナルの事だ。自分では分からないが、パルキアが空間の乱れを感じたらしい。

「（どうすれば良い？）」

『外して持つてくるほかは無かるう。』

外して持つてくると言われても、どれだか分からないし第一タンナルの前で持つていくには理由が必要だ。

「タンナル様。一度自室に戻られたらいかがですか？」

「いや、医師師が来るまで居させてもらいます。」

ランクの部屋から出てもらうためにした提案をあつさりと断られてしまった。

暫く考えを巡らせて、いい案が一つ思いついた。

「彼の事は、我々に任せて下さい。僕在教育係のハランは医術を心得ています。今、呼んできます。」

一礼をして部屋から飛び出した。

「ハラン、どこだ！ハラーン！」

「何ですか？折角気持ちよく昼寝していた所を……ゲツ！王子。」

自室に飛び入ったためハランが飛び起きる。

「ゲツ！とは何だ、顔に何か付いているのか？」

「い、いえ。その様な事は。」

ハランは多分寝ていた事を怒られると思っているのだろうが、そんな事はどうでもいい。

「ハラン、確かサガル師からまじないを教えてもらっているそうだな。」

「な、なぜその様な事を……。申し訳ありません！」

ハランが自分より大きな体を小さくして謝る。

「国王には……。」

「実はそのまじないを見せる時が来たんだ。」

ハランがポカンとした。無理もない。

とりあえず、ランクはパルキアの注告と自分の考えを伝える。

「どっ？」

「そんなのお安いご用です。では準備しますね。」

ハランは、ランクから聞いたタンナルがいる部屋の戸を叩いた。

「ハランです。」

一声かけると、戸が開きタンナルが中に招き入れてくれた。
タンナルが不安そうに見つめてくる。」

「大丈夫ですよ。私は医術の心得がありますから。」

自分のまじないを信じて、カイナルを調べていく。
暫く、調べていくと右腕の辺りに違和感を感じた。

ハランは右腕に着けている腕輪を素早く外すと、持っていた薬箱
の中に滑り込ませた。

それでも目覚めないため、栄養剤を飲ませておいた。

「あのー。タンナル様、ご期待に添う事は出来なかったようです。
一応、栄養剤を飲ませておいたのでこれで持つかと……。」「

「そう、ですか。」

タンナルは暫くボーっとしてしたが、何度が瞬きをするとハラ
ンがまだ戻っていない事に気づいたらしい。『もういいと。』と促
している。

ハランは一礼をして、入れ替わりに入ってきた医師師に後を任せ
た。

7話 問題発生（前書き）

ランク「サブタイトル、ビミョーだね。」

どこでそんな言葉を……。

ランク「色々だね。」

7話 問題発生

ランクの目の前に木製の腕輪が出された。

「？ これは。」

「カイナル様が付けていた物です。これから違和感があったので。」

ハランが腕輪を良く見える位置に持つていく。どう見ても普通の人が見ても何も分からないが、まじないを通して見ると確かに何か感じる。

「それにしても、いったい何なんだろう？」

「調べてみましょう。」

ハランが腕輪に手をかける。

「やめた方が……。」

「大丈夫ですって。」

そのまま、ハランは筆で何かを書き込むと片腕にはめた。

「キャッ！」

「どうした！」

「なんちゃって。」

でた、ハランの酷い冗談。人の親切心に付け込んで。

「おかげで、大変な事が分かりました。」

「大変なこと？」

そういう時ばかりとても重要な事を言う。

「王子、タンナル様に今日の集まりは中止して頂きましょう。」

「理由を先に。」

「本日の集まりで、各国の代表者を襲わせるつもりの方です。私だけではとても説得できないので王子、お願いします。」

「何でそんな大切な事を言わないんだ！」

「言っただけじゃないですか。」

確かに言っただけ、物事には順番がある。

「行ってくる。」

「どちらへ？」

「タンナル様の所へ。」

ランクは再びタンナルの所へ走った。

ナーリア城の一番上、ナーリアの海を象った国旗のすぐ下に赤い体毛で覆われ足の長いポケモン、バシャーモが座っていた。

「ばれちゃった。まさか見つかるとは思わなかったけど、相手は『あれ』から私を探しだせないくらい下等なまじない師。回収する必要は無いわね。」

ここから地上まではかなりの高さがあるが、まるでここに床があるかのように立ち上がる。

「もう命令はやったし後は適当にやってくれでしよ。観光でもしてから軍に合流すれば十分ね。あっちは今頃何をやってるのかしら。」

バシャーモは身軽に屋根を伝って城の敷地外へ出ると街の闇に消えていった。

ランクは良くない知らせを持って部屋に戻ってきた。

「王子、どうでしたか？」

「聞かなくても分かるでしょ。説明不十分、却下だよ。」

それを聞いたハランはランクと一緒に落胆した。このままだとなり危険だ。

「ハラン。」

「はい？」

「何人護衛を連れてきた？」

「何人？えー、八名です。」

「少ないな。」

王子は何を考えているのかすぐに分かる。王子が小さい頃から一緒なのだ。おそらく、敵を倒すつもりだ。

「王子、いくらなんでも……。」

「ラーク様に、」

二人の声が同時に重なり話が止まる。

「ハランから言って良いよ。」

「いえ、王子から。」

「うん。ラーク様に頼んで見方を増やそうと思っただ。今から行ってくる。」

「あっ！王子！」

ハランが呼び止める前にランクは部屋を飛び出していた。

8話 交渉（前書き）

ランク「初めての外交だ。」

これが失敗したら、どうなるだろうね。

ランク「不吉なこと言わないでよ。」

8話 交渉

ランクは誰もいない廊下を早足で歩いていく。行き先は、ランクに用意された部屋だ。

だが、ランクは一つ不安を抱えていた。

ラークは、よく出歩き、部屋にいないことがある。と聞いたからだ。

戸の前に立って、中の気配を探ってみる。

気配は無い。

「（やっぱり無理か。）」

諦めかけて部屋から離れようとした時、

「どうぞ、ガレンノ王子様。」

はつきりとしたラークの声が中から聞こえてきた。

「なに緊張してるの。今まで普通に話してたじゃない。」

ラークがお茶の入ったカップを口に運ぶ。

挨拶してなかに入ったまでは良いけど、その後を何も考えていな

かった。

「あ、あの。」

「ん？」

その後から何から話していいのか分からない。

「えーつとですね……。」

「言いたい事ははっきり言いなさい。信用を無くすよ。」

「ハ、ハイ！実は……。」

ランクは自分の知っている事を全て話した。

「ですから、ガレンに力を貸してください。」

ランクは深々と頭を下げた。カチリと小さい音が鳴った。たぶん、ラークがカップを机の上に置いたのだろう。

「如何する。ケルト。」

「国王がこの様な場合で此方の忠告を受け入れた事は一度も無いでしょう。」

「それもそうか。ガレンノ王子様、大陸の東の国の港町の海に霊が集まると言われている岩があるのは知ってる？」

ランクは首を横に振った。ガレン王国はこう見えて閉鎖的な国で

外国の話などは、カトラルかナーリアへ行つた商人が持つてくる事くらいしか分らない。

「ある晩、酒に酔つた船乗りがその岩の近くにある道を通りかかったんだ。すると何か白い物が動いている。

その岩は海で死んだ人の霊が集まるらしいから、かなり驚いたんだろうね。一目散に逃げに行ったんだよ。それで次の日に町の人を集めてその岩を見に行つたら……。」

ラークが一つ間を空ける。

「見に行つたら。どうなつたんです？」

「そうしたら、近くの家から飛ばされた白い洗濯物が引つ掛かつてたんだつてさ。」

ラークがその光景を想像してくすりと笑つた。

「僕の意見が見間違いだったという事ですか？」

「そんな事は言つて無いよ。」

ラークがお茶をすする。

「あ、冷めちゃつた。つまり信じるかどうかはその人次第つてこと。その船乗りは迷信を信じていたから、あんな幻覚を見たんだろうね。」

ラークは暫く黙つて、ケルトを呼んだ。

「私達は何名連れて来た。」

「私を含めて、十三名です。」

「では、全員ガレン王国の作戦に参加。カトラルは全力で貴方方に協力しますよ。」

それは、カトラルがランクの事を信じてくれたことを意味した。

8話 交渉（後書き）

次は、サス貴国との交渉です。

9 話 交渉2（前書き）

やっと書けました！

9話 交渉2

ランクは廊下を音を立てない様に進んで行った。

あの人は兎に角怖そうなので、失礼の無いようにしないといけない。

「ここで、合ってるよね？」

先程、部屋を間違えた事も慎重になっている要因の一つだ。ハランに会わなかったら、どうなっていたか。

「何を為さっているのですか？」

「この部屋の人と話がしたくて。」

後ろから来た質問に適当に答える。

「でも、女性の部屋をしかも私達の部屋を覗くのは、随分と度胸がお有りです。」

「え、ええまあ。って！ ハミネ様！？」

声の主にやっと気付いたランクは、後ろに跳び下がって、戸に頭をぶつけた。

勿論、ハミネの顔は怒りの上に無理やり笑顔を作っている。

「ま、良いわ。入るなら入って。」

ハミネがランクを無視して戸を開ける。

中から、如何にも女性らしい甘い匂いが漂ってきた。

「！ ナナ、寝て無くて良いの？」

「ええ。大丈夫よ。多分。」

「多分って何よ。やっぱり……。」

ハミネが心配そうに見つめる先には、サス貴国を治めるもう一人。白い翼をもつポケモン、トゲチツスが外を眺めていた。確か、彼女は体が弱かった筈じゃ。

「ゴホツゴホツ！」

ナナが、突然、咳き込む。

「御免なさい。やっぱり無理みたいね……。」

ナナが、ソファアの上に横になる。

「分かったでしょう。」

ハミネがランクを背に言った。

「我々の国には、貴方達に貸せる力は無い。貴方が、この国をどうしたいか何て分かりませんが、手を貸すお人よしは、カトラルだけですよ。」

現実を突き付けられる。

だが、各国が連係を取らない訳にはいかない。

「一体、何の話？」

ナナがハミネに尋ねる。

この手があった。

「いいえ。何でも、」

「ナナ様。私の話を聞いて下さい。」

ハミネが言い終わる前に、ナナに自分の考えを伝えた。

「どうでしょうか？」

サス貴国は二人の貴族によって治められている。どちらかの考えが違えば、状況は変わるはずだ。

ナナは、暫く黙って考えると、口を開いた。

「分かったわ。ねえ、ハミネ。良いでしょう。困っていらっしやるわ。」

「ナナ！」

「ハミネ、私達のために国があるの？貴女は、何時も国は民の為にあるんだって言うていたけど嘘だったの？」

「クツ……。ナナが良いなら。」

「これで良いでしょう？。」

ナナがランクを見る。

「ありがとうございます。」

ランクは深々と頭を下げた。

「そういえば、ハミネ様は何故私の考えをご存知だったのですか？」

「ああ、話が聞こえたのよ。貴方はもう少し静かに話すべきね。」

と言う事は、敵にも聞かれたかもしれない。急がないと。

この調子でシュロ王国も策に乗ってきた。
準備は整った。

10話 海上で

船頭が波を切って船が進んでいた。

乗っているのは、シュラーとカミアだ。

「なあ。今の場所、分かる？」

「ちよつと待つて。今、計算するから。」

カミアが船酔いを抑えて、座標を計算していく。
予定では、もうすぐ本土が見えてくるはずだ。

「あれ？」

カミアが良くない前兆の声を出す。

「如何した？」

「かなり流されてる……。本来の航路より、東に十数哩。」

「かゝ！ やつぱり、左舷の舵がやられちゃったからな。」

この船は、シュラーとカミアが、昔、古い船を貰って改造した物だ。カミアの水鉄砲での加速に耐えられるようにするためだ。

その時一緒に、舵を小回りが利く物にしたため、左舷と右舷、二つの舵が付いている。

「だからあれは止めようって。」

事は、少し前、ホーエイムの軍船に追われて逃げるときに大型船では絶対に通れない浅瀬を抜けていった。その時に左舷の舵が壊れてしまった。

「良いじゃねえかよ。逃げ切れたんだし。右舷の舵だけで本土までは行けるって。ここは、ナーリアの海のと真中。そう簡単に、敵だつて追つて来ないさ。」

シユラーは、カミアの出した位置から航路を決めると、左に舵を切った。

暫く船を進めていく。

「ねえ。」

「何だ？カミア。」

「ホーエイムの目的って何だと思う？」

「！わっ」

シユラーは驚いて、舵を切った。

船が、横波にあおられる。

「危ないな。」

「そんな話、突然、訊いてくるからだろ！ どうせ、領土を奪いたいとかそんなんだろ。」

シユラーは、少し声を荒げて返した。

今、その話はされたくない。生まれ育った地がどうなってるかな

んて考えたくない。

「本当にそうなの？　僕は、侵略だとは思えないんだよね。」

「どついう意味だよ。」

カミアは一息間を空けて、切り出した。

「普通なら、こんな時に仕掛けて来ないよ。各国のトップが集まってるんだから。あつちとしても、全ての国と戦うのは至難の業だしね。」

シュラーは暫く呆然としていたが、

「カミア。」

「ん？」

「お前、天つオ！だったら、急がないとな。」

シュラーが、帆の向きを変えると、船が少し加速した。

「ねえ。気になってたんだけどさ。この事、誰に伝えるの。」

「そんなの、カイナルしか居ないだろ！」

「それもそうだね……うぶっ。」

カミアがダウンしたので、シュラーは一人で、船を走らせた。

11話 乱戦（前書き）

カイナルのカッコいい姿が見られるかも。

カイナル「かもってなんだ！」

11話 乱戦

ランクは、辺りを見回した。

壁の隅のほうには、変装したガレン兵が待機している。

そのすぐ左手にカトラルのケルトが。この前と同じように警戒を怠らない。

その反対側には、サス貴国が。入り口近くには、シュロ王国の兵も何処かにいる。

「そんなに見てると、怪しまれるよ。」

ポンツ と肩を叩いてきたのは、ラーク様だ。

「これから楽しくなるんだから。」

楽しくなるというのは、どういう意味での楽しくなるだろう。顔からは全く予想出来ないが、笑っているのは確かだ。

「これが嘘だったら、分かっているじゃないですか。」

そう来るのは、ハミネだ。ナナ様はまた体調を崩したらしい。

「これらの兵は、貴方がすべて置いた。その責任は、ご理解出来ていますよね？」

「も、勿論です。」

ハミネの顔はやはり口だけ笑っている。
見るだけで怖い。

「何か顔に付いてますか？」

「い、いえ。そのような事は……。」

やっぱり怖い。

暫くして、豪華な料理がばれて来た。

流石は、海洋国家ナーリア。海の幸が満載で、どれも美味しそうだが、やはり誰も手を付けない。

そういえば、肝心のタンナルが居ない。

「彼なら、私から、話を付けておいた。何かしら、準備はして来るよ。」

考えを見透かした様にラークが耳元囁いた。

「あの人は、頭が良いからね。」

そう言いながらも、随分と警戒している。

「見つけた。」

そう言っで、さつき料理を運んで来た給仕の一人に近付く。

その時。ケルトが一瞬で、その人を床に押さえつけた。横では、ラークが悠然と取り落した刃物を拾っている。

「敵だ！ 構えろ！」

ケルトが叫ぶ前に、既に近くの給仕が戦闘体制に入っていた。ケルトの声にすぐさま反応した、兵達も構える。

部屋の出入り口は、既に固めてあるので敵を逃がす事はない。そうこうしている間にも、状況は変わり続けている。

味方の兵が、近くに居た敵に拳を叩きつける。

味方の鍛えあげられた身体の隙間から、ケルトが三人まとめて薙ぎ倒すのが見えた。

と、同時にランクの顔の目の前に毒針が飛んできた。あたる。

直感したが、体が動かない。時が止まった気がした。

「ったく。だから、トロイ奴は嫌いなんだよ。」

カーンという音と同時に、何処かで聞いたことのある声がした。ランクは薄っすらと目を開ける。

青と、クリーム色の背中が見える。

「けど、もっと許せないのは、他人の家で、暴れまわってる奴だ。」

ランクの目の前に飛び降りたカイナルが鋭い眼光を走らせる。

「貴様ら！ 俺達の国に土足で踏み込むんじゃね！」

カイナルは、混乱の渦の中に飛び込んだ。

12話 伝言

カイナルはまず、敵の後ろから頭を殴りつけた。そして間髪いれずにその敵を突き飛ばし、更に二人を片付けた。

「海の男をなめるなよ！」

カイナルが、怒鳴ると一瞬敵が怯んだ。

カイナルは、手近に居る敵を更になぎ倒したが、数はなかなか減らない。

「あゝ。もう面倒くせえ。」

不機嫌なカイナルが、両手を挙げその手を振り下ろした。

「波乗りっ！」

何処からか現れた大波が、敵も味方も無く飲み込み壁に叩き付けた。

「やりすぎじゃ……。」

ランクは、何時の間にか掴まえられていたランクの腕の中で呟いた。

「ケルトゥ。大丈夫？」

ランクはそんな事気にしていない様子で、何処かにいるケルトを呼んだ。

暫くすると、瓦礫の中からケルトが姿を現した。片手には気絶ぎりぎりの敵だ。

「無事です。国王。」

「あの子、元気あり過ぎじゃない。」

ハミネが下から這い出てきた。

「危なっかしい。」

流石のハミネも、呆れている。

「だから、駄目ですって！」

「何だよ！ 俺たちは、カイナルに用があるんだっ！」

突然、外が騒がしくなった。場にいる全員が警戒する。

「ですから……。」

「カミアアタック！」

正面にある大扉が、勢いよく開かれた。と同時に二人、中に飛び入ってきた。

一人は、シャワーズ。もう一人は、

「シュラー。何やってんだ？ カミアも。」

「おお、カイナル。久しぶり。」

カイナルは、二人を知っているらしい。

「って、再会の挨拶してる場合じゃねえ！ カイナル、島が大変なんだ！」

そう言っつて、シュラーが話し出したが、話が滅茶苦茶で伝わってこない。

「ああ、もう。ホント、船だけだね。僕が説明するから、黙ってて。」

横にいるシャワーズ。カミアが、シュラーの話を分かりやすくまとめてカイナルに伝えた。

「どうやら、こんな所でのんびりしている暇は無いらしい。」

「くそっ！ 宣戦布告無しで仕掛けてくるなんて。親父に言って来る。」

カイナルは真剣な顔つきで、部屋を飛び出していった。

「じゃあ、我々もこんな所で固まっているのは、まずいですね。」

ラークは、ランクを床におろした。

「取り合えず。ナーリアの決定を待つしかないね。」

12話 伝言（後書き）

分かり難いかもしれませんが、最後の言ったのはラークさんです。

カミア「ねえねえ。カミアアタックって……。」

うん。シュラーがカミアを思いっきり投げつける。

カミア「どおりで背中が痛いわけだ。（涙）」

13話 決戦へ

黒く厚い雲が、天を覆っている。

朝日が無い軍港は、寒々としていた。

「本当に、行っちゃうの？ 折角、仲良く慣れたと思ったのに。」

ナーリアは、ホーエイムの進軍を迎え撃つ形で、戦火を切る事になった。

「ああ。俺達の海を汚す訳には、いかないからな。」

カイナルは、ナーリア軍の第一部隊、隊長だ。行かない事は許されない。

「ランク。お前に言つときたい事がある。」

「何？」

「……。かったな。心配かけて。」

カイナルは、顔を背けて言った。

「どういたしまして。 あっ！ 忘れるところだった！」

ランクは、大切な事を思い出した時の声を上げて、後ろにいる国王達を呼んだ。

「何の用？」

「ラークが、尋ね返す。」

「あの、僕の勝手な意見なんですけど……。」

「何よ。さつさと言いなさい。誰にも相手にされなくなるわよ。」

ハミネが口ごもるランクを問い詰める。

「あの、今此処にいる、全ての国で同盟を結んだらどうかと……。」

「そうするとどうなる？」

あまり喋らないシュロ王が珍しく口を開いた。

「えー。そうするとですね……。例えば……。」

「例えば、どこかの国が、危機に瀕した時に援助する事ができる。その逆の然り（しかり）。でしょ。」

流石、フォローが上手い。

「勿論、我々は賛成だけだね。」

「カトラルが賛成なら、私達もそうするしかないわね。」

シュロ王も頷く。

ナーリアは、

「そんな凄い船、乗らねえ奴なんかいねえよ。」

賛成と言う事だ。

あとは、紙とペンとそれぞれの国王達の証明が欲しいが、それは後からでも大丈夫だろう。

「だがな、」

カイナルが口を開いた。

「この戦いは俺達の戦いだから、手出しは無用だ。」

これは、ナーリアの。カイナルの、意志だ。

「分かった。絶対、生きて。」

ランクが手を差し出す。

「俺を誰だと思ってるんだ。」

カイナルは、その手を強く、握り返した。

13話 決戦へ（後書き）

ランク「ねえねえ。何で最終話って書かなかったの？」

ん？ これは最終話だけど、最終話じゃないんだよね。

ランク「何言ってるの？」

その内分かるさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1863k/>

南海の使者

2010年11月14日10時33分発行